

特70

550

五年十一月二十七日第三種郵便物認可

日本臨時増刊



百一讀
二十年後の東京

發行所 東京 商日

特70

0. 550



商家風人獎勵會名譽會長

男爵 前島 密君

男爵



商家風人獎勵會 幹事 谷 新太郎君

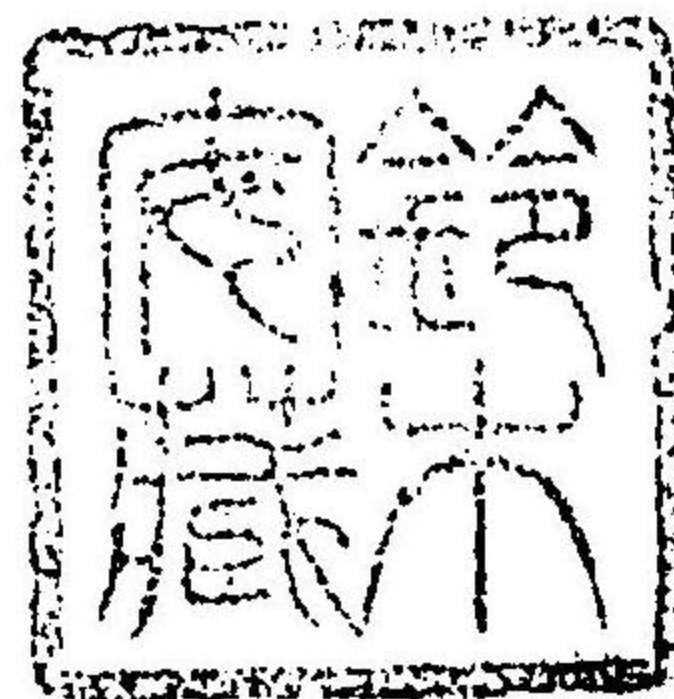
御菓子舗

新橋

青

柳

電話新橋一四〇六番





主店ルーモ銀金井岩
君士友井岩



長社會藥製濱横
君藏菊堀小



長社聞新工商本日
君吉多井能田



家勤忠上同
員店商部坂
君郎五權賀志



しりか厚用信に界商び井さ氏丹伊
人配支店商内竹
君郎三信永増



界商頃の年六五十三治明
しひ擔を望衆てしと花の
人配支店器漆屋江黒
君平作丹伊



者明發子菓酒
君郎三茂山小

本邦に商店員獎勵會の初めて實現したるは今より卅三年前即ち明治卅四年の三月なりき、時の報知新聞主唱となり今は亡き前島男爵が名譽會長たり報知社長箕浦勝人氏が會長、同社經濟部主任谷新太郎氏幹事となり毎年一回宛上野公園に於て獎勵大會を催し都下幾萬の雇人を鼓舞振作せしめたり爾來星移り物變り三十年後の今日吾實業界の牛耳を採れる紳士は多くこの獎勵會より受賞せられし昔の雇人なり即ち前掲肖像の田野井、小堀、小山、伊丹、増永、志賀氏の如きは慥か第一回より第三回迄の大會にて忠勤賞盃を受けし人なりとか

明治六十六年の晩夏記す

白髮散史

百讀「三十年後の東京」上編目次

序

三十年後の東京を讀む	苦情子	第四回 駛空船の市中遊覽(中)……………	一三
前置(上) 豪商秘露より歸る……………	一	第五回 駛空船の市中遊覽(下)……………	一五
前置(下) 豪商の素性……………	三	第六回 上野公園の散策(上)……………	一八
第一回 芝浦ホテルの樓上(上)……………	五	第七回 上野公園の散策(下)……………	二一
第二回 芝浦ホテルの樓上(下)……………	七	第八回 芝商品陳列處の服裝談……………	二四
第三回 駛空船の市中遊覽(上)……………	九	第九回 湖月樓の園遊會(上)……………	二七
		第十回 湖月樓の園遊會(下)……………	三一

「三十年後の東京」上編附録

一、 商家青年禁令十六ヶ條……………	二八
二、 商家青年禁令十六ヶ條……………	二八
三、 商家青年禁令十六ヶ條……………	二八

三十年後の東京と讀む

この度默笑庵主人がものせられし「三十年後の東京」を讀むに其着想の奇抜なる正に當代文字界のダイヤモンドに値せらる可き歟其内容をいへば

「東京灣の築港せられてユスモポリタンとしての市は人間繁榮の極を示さるゝに其波止場に往來する紳士の半は以上は殆んど我等の舊友即ち商家青年同志會同窓の友に非ざるはなく一人喜んで我黨世界を呼へは万人相迎へて歡聲湧くが如し

布哇に亞米利加に支那に濠洲に英京に巴里に或は空中飛航船の彼等今や甲板に日本の花として世界の賞賛を蒙れども噫其三十年前は是皆我等と共に或は子弟として或は雇人として日常の小使に差間へ穢染たる衣物に鼻もちのならぬもありたり偶々富豪の子弟たる向は斯る事はあらざりしもされこれにて其

身の自由は頑固たる老爺或は家格の下に縛られるありて實に何れも同じくあはれ辛苦の人たりしに年積つて此に三十年の後日に至るや皆申合はしたるか如く堂々として商海の群星として幸に世界の光を加ふるに至れるなり」

斯る面白しき日出度而して時として寧ろ滑稽の如き記事を綴るに筆は流に従ふで舟を駛し意は風颺枯葉を拂ふに似て快いふ可らずこの著の如き眞に文字界のダイヤモンドといふ可らずや

商日本社編輯局

苦情子識

百讀三十年後の東京

默笑庵主人

前置(上)

豪商秘露より歸る

時は維れ明治六十六年七月二十日の午後五時なり、南米秘露より歸着せる東洋汽船トラス社會社の第七秘露丸は大森沖にて檢疫と瓦斯消毒を畢へ、徐々東京港内に入りて臺場通三番の棧橋に繋りぬ、本船は近ごろ月島新地の大倉造船所にて製作せる登薄噸數三萬二千五百といふ大形にて梅浦修博士が發明に係る電氣自働機關を据付け、一時間五十哩といふ快速力を有すれば去る十五日午前同國を發し、五晝夜半にてはや歸り來れるなり、棧橋に敷設せる自働電車にて乗客は大半上陸を畢りたるが、上等客の中には神學博士江副要造、吳服取引所の理事長飯沼仙三、臺灣樟腦會社社長吉田平輔、懷中鳥銃の發明者門間正順、白米輸出商久能木孝治、南洋小間物陳列場技師平岡貞、佛國法律學士高梨荆棘、暹羅帝室裁縫師佐藤健太、東京本綿會社支配人戸崎秀雄、癩

前置(上) 豪商秘露より歸る

病必治薬の創製者古田友隆、東洋砂糖トラスト會社の理事野村瀨三郎、倫敦醬油醸造會社の顧問濱田直次郎などの數人も見へたり、やがて日本商工新聞社長田能井多吉氏の導にて歡呼を以て機橋にあつまれる紳士連に迎られ上陸せる夫婦の客あり夫なる人は顔の半ば濃き鬚髯もて掩はれたる五十路に近き老實なる紳士にて、伴はれたる夫人は歳まだ若き亞米利加風の美人なるが、これぞ是れ都下各新聞が一月前よりその成功談を連載し、世人をして如何なる風裁の人物なるかを頻りに想望せしめたる、昔は九段徳海屋洋服店の小僧、今は秘露鑛山王として知られたる竹田節藏その人の夫妻にぞある。

前置(下)

豪商の素性

今は早三十年の昔、日比谷ヶ原に箱庭擬ひの小公園が出来て——時の超然内閣が政友會といふ小政黨をベテン政略で操縦したといふと丈けが僅に歴史に残つて居る明治三十六年の夏なりき、阿波の祖谷といふ山奥から何の考も文無しで飛出した竹田節藏といふ一書生、始めは知人の周旋で何處かへ學僕にと思つたところが儘ならず、詮方なしに

小僧奉公に住込だのが、當時株式市場の花といはれた莊伴次が營める徳海屋といふ洋服店、時に節藏未だ十六歳の小ワツバナれど根が惻憐な生れなれば慣るゝに従ふて次第に主人の信用を得、よき小僧よと眼をかけて使はるゝに至りしが、蛟龍久しく池中のものにあらず、節藏は商界の模様が少し分つてから膽力が追々太くなり、特に片山潜博士の著はせる渡米の葉を讀みて、より外遊の感止み難く、其年の冬竟に暇を主家に請ひ、吉本襄が企圖せる南米移民の一團に加はり、遂に百折不撓の壯志を齎らして秘露に渡航するに至れるなり、この渡航に就ては江副商會の濱垣真一同國人の縁にて幹旋至らざるなく、大倉夫人時子、日下部夫人米子、梅浦夫人六子など旅費を恵み、渡航の資は豫て仁俠家の聞へある第三徳海屋の飯沼彦太郎が情けにて辯するを得たるは忘るべからざるとぞと節藏は懷舊談の序には常に之れを人に語れりとぞ。

斯くて秘露に渡航せる節藏は移民の群に交りて、荒野を開拓し古加樹栽植の業に従ひしが、素より堅忍不拔の氣性を持ちし男として勤勉衆に擢でければ、程なく擧げられて耕作者の小頭となり、追々進で三年を経たざるにブララン州古加栽植地の監督とまで上りぬ、後聯成草薙機、古加碎紛器等を發明して數千ドルルの報酬を得たるを資本

第一回 芝浦ホテルの樓上(上)

四

として荒野の開墾に従事し、次第に産を積みてより自から苦心發見せる銀山の採掘をなし、幸通累りに至りて今は國中に五十餘所の大金、銀鑛山を所有し、南北亞米利加にて鑛山王といはゞエス竹田なるを知らぬものなき迄に成功したるなりき、節藏は斯く功成り名遂げたる上は、一度は故國に販りて亡き父母の墓を展し、その昔恩誼を蒙りたる人々に逢ひて禮をも述べん考なりしが、折からおのれ大株主となりて企てたる敦賀より堺に至る間を開墾する日本運河會社の起工式に臨むの用起れるを幸ひ、最愛の夫人を伴ひ久々にて歸朝したるなるが、夫人は米國第一の企業家なるモルガンの五女にてぞある。

第一回 芝浦ホテルの樓上(上)

節藏夫妻が投宿せるは臺場通五番町の芝浦ホテルにて、昔は芝浦海水浴と呼びたるが築港後爰に宏壯なる八層樓を新築して移れるなり、三層なる六十五號の來賓室に節藏は訪ひ來れる關東信用貯蓄組合頭取谷岡五郎、東洋毛絲紡績會社長片桐竹三郎、吳服商來栖貞次等と先程より卓を圍で談笑したるが、節藏は談を繼で「御互に自轉車で使

に駆け廻るを嬉しがつた時代に較べると東京も餘程變つた子、先づ私が感じたのは此築港だ、臺場といふ根柢があつたから工事が容易く出來たといふもの、思つたよりは旨く出來て居る、一時は市區改正などいつて騒いだ様であつたが、斯ふ繁華が東南に移りて市街が劃然となつては東洋の大都府として耻かしいとはないよ、片桐「そふですとも、貴方が御渡航の時まではまだアノガタ馬車が狭い街路を驅けて居つて塵埃がある馬糞の臭氣が鼻を撲つといふ實に不潔なものでしたよ、それに此邊が遠淺で小舟も自由に通へぬといふ不便利極まる處でしたが、斯く數萬噸の大船が横着けが出来るに至つたは一に科學が進歩した賜でしやふ」談中に節藏は卓に裝置せる電氣符號を押したるに、やがて小僕がアルミ製の器に紅白の菓子盛りを盛りて持ち出でぬ、節「サア如何ですか一つ召上れ」とアルミ製の菓子器を指し「器物なども頗る進歩しましたね、その昔にはアルミ製とて日本橋の金丸支店から賣出したのを、物珍しげに使つた位でしたが、今は日常何處の家でも使はぬとばかりありますまい今日をホントにアルミ時代といふのでしやふ、夫から此菓子は昨日初めて味はつたのですがよい出來てすな、來「紅いのは頗る新橋の青柳から賣出したチョコレート糖でしやふ、あちらの主人は中々製菓

に熱心な人で、悴の金次を倫敦へやつてモルトン製菓會社で修業させたが、金次が苦心の末菓子で水菓子を兼ねた味に仕上げたのです。白い方はまだ知りませぬ子。『それは僕が知つて居る、小山茂三郎とよふ人が發明した酒菓子です、ウ井スキー、ブレンダーなどを化學を應用して凝結させたのだから、僅か二つ三つ喫つても大抵に酔ひますよ。』昔は仕事がかつたものだから酒は爛をして小さな盃で献酬をする、菓子は茶を煮てから喫るといふことが出来たも、物事が斯く複雑になつて忙しい軀であるからそんな氣樂などは到底出来ませんよ』と談しながら片桐と來栖は白いウ井スキー菓子で酔を買ひ、外二人は青柳の新製菓で舌鼓をうちつゝある時しも、ベルの荐りに鳴るに振願れば壁上に装置せる電鏡に『田能井ですが直ぐ伺つても御差支はありませぬか』とあり／＼と表れたり、節藏は起て電機に對ひ返事を通する時、三人は別を告げ各待せ置たる駛空船に乗りてぞ歸りぬ。

第二一回 芝浦ホテルの樓上(下)

駛空船は理學博士江副隆一が米國在留中に發明せる最新式の空中飛行船にて、電氣に

て羽翼狀の機器を動かす仕掛なれば、空中を飛翔するとの自在なる燕の飛ぶが如く、今はその昔自轉車の流行せしよりも盛に流行しつゝあるが、田能井日本商工新聞社長が横濱製藥會社社長小堀菊造、品川銀行頭取安藤一郎、三井製紙所長大平市之助、大宮海産物合名會社長大宮鬼一郎を伴ひて節藏を訪ふも、また之れに乗りて求りしなり例の酒菓手に酔ひたりと思しく談は佳興に入りて何れも聲高に語らひつゝ『君が渡航の當時私は商報雜誌に筆を操つて居つたが、妥協といふ茶番狂言が行はれて議會は無事に終つたも、その跡政海は擾れる外交の雲行は荒くなる、その餘波が經濟界に及で世の中は不景氣となつたから、私は頗る骨折つて救済のことを論じて見たともありましたが今から想へば夢のやふです、當時都下でよく賣れた新聞は萬朝、報知、二六などであつたも十萬の上には出なかつたのですが、私の新聞は此際日々二十版まで刷つて三十五萬枚は確かに出て居ります、世の變遷も随分激しいものです子。』『そりア強氣です子、併し變遷の太だしきもの獨り新聞業のみならずです、私の眼に映るもの皆進歩せざるはありませぬ、が政府の變り方は格別である、當時の内閣は超然とか藩閥とかいはれる官權派に占有されて居たでしやふ、それが政黨は進歩と保守の二

派に分れて國家緊要の問題で勝を制した方が内閣を組織するといふ、眞の憲法政治が行はれることになつた、私の出掛ける時分に新市長に選ばれた尾崎行雄とかいふ理想派の人達の主張が、此頃に至りて漸く實行されたのですよ。『御觀察の通りです、彼の時代までは政治社會が一般に腐敗して國運の進歩を妨げることも尠からぬ有様であつたが斯く迄政黨内閣が旨く組織されるに至るとは想はなかつたです。』
 『それに昔は議員屋といふ一種の株があつて無職の財産の少い輩が國家の大政を議するに與り、着實なる實業家は殆ど政治に關係なしといふ風でありました、今日では實力ある實業家ならずば政界に立てぬことになつたも大なる進歩であらふと思はれますな。』
 『安、何様今日の領土は東亞細亞の半ばに及び歳入の歳出に超過すると十億餘萬圓といふ富國となつたものですから、財政上の心配が絶て無くツて遣りよいが、その昔は財政行政の整理といふ小問題で議會の開ける度に内閣と政黨との小難合が始まる、國家防衛上缺ぐべからざる海軍擴張費を輿論が反對する地租を増徴して支出しやふといふ迄苦んだ位で實に思へば氣の毒であつたですよ。』
 『先程から段々有益なお話を伺いました、これからチト市中の景物に出掛けたいですが、諸君如何でしやう御話しつゝ御同行下すツては』

大宮 『私は今晚仙臺の支店まで參る筈ですからこれで失敬致しませう。』
 大平 『私も金澤に用がありますで御免を蒙りますが、明朝歸つてから又伺いましやう。』
 『では安藤君と二人で東道となりませう。』と卓に裝置せる電氣符號を押しして駛空船の準備を命せり

第三回 駛空船の市中遊覽(上)

草より出でし草に入ると詠まれたる荒涼たる武藏野の原は、茫々數里の間人の往くなく鳥の鳴くなき淋しき處なりしも、一たび江戸重長荏土に城き、豊島清光豊島の莊を拓ひてより人烟あちこちに漸く増し、次で太田持資千代田の城を築きてよりは稍町らしきものも形づくられ、昔の追ふ流水の影も何時しか失せて爰處鼓聲蹄音を聞くの巷となりしが、老雄家康茅土を受けてより陵を平げ海を埋め、市坊を開き交通を便にし坐して四方に號令するの大都となり、爾來三百年、世は武士驕り商工樂むの間に於て長足の進歩をなし、維新を経て帝城を爰に定められてより、宇内の趨勢は泰西文物の輸入を促がし、四方の物貨は輻輳し天下人物の淵藪となり、僅か三十餘年の後には東洋第一の大都府とはなりけり、節藏が出發せる時にも事物は斯く進歩したりしも、之

れを今日の絶大なる進歩に比すれば、なほ桑滄の感ぞ起れる

やがて小僕が準備成れるを告ぐるに、節藏夫妻は田能井、小堀の案内にて駛空船に乗移れば船は五十メートルの高さに上れり

「どふです全都の形勢を一目の下に見た處は、昔とは非常に違つて居りまじやふ

「そふですとも、千代田の皇城、芝、上野の公園などに樹木が相變らず多いので漸つと東京であるといふことが分る位ですもの」

夫人「ホントに廣いところ、妻は新約克などよりは廣大なやふに思ひます、そして清らかな美しい都と信じますよ

「アノ木立の間に大理石で建てた大きな家が並でまじやふ、アレが濱の離宮で、海邊であつたのが築港が出来てから繁華の中心になりました

大森から越中島までの間を埋立て新港を築た大仕掛ですもの、商港としては恐くは世界第一でしやふ

「南に見へる八層樓が私の居る芝浦ホテルでしやふが、それから少し隔つてある高い建物は何ですか

「ズット南へよつた十階がもと鍛冶橋外で人氣のよかつた中央旅館が移つたので、次の赤塗のステキに大きな構へが、ソレ御承知の勿驚の岩谷商會の輸出部です、それから古代風の優美な建物が幾つも庭園の間に建て居

るのがその横に見へまじやふ、アレが有名な西貝旅館です、その隣りが松屋の呉服店

岩井の金銀モール店柏屋洋傘店、その前側で高い建物は、千葉の烟草店に風月の惣本店です、イヤ皆立派になりました

「小」田野井チト船の位置を轉じやふじやないか、アレ御覽なさい大きな船渠がありまじやふ、是は大倉家が一手で昔の月島を築出して開いた造船所で、三井家の芝浦鐵工會社と相並ぶ都下での大工場です、コチラが築地公園、頗る大きな構へです、昔此處は海軍大學校であつたのですか本願寺の境内をも併

せて都人遊歩の場となりまじやふ

夫人「立派な橋が澤山に架つて居ると子」

「もとは永代橋から吾妻橋まで五つ架つて居つたのですが、今じや貴女築地公園と千住までの間に二十幾つといふ橋の數で、御覽なさい日光に映つて輝て居るは橋欄を皆アルミ鍍金

としたからです、昔は五つとも釣橋になつて居りましたが、人造石で以て橋脚を作る方が堅固で經濟で優美であるからと斯ふ改つたのです

「節」何ですな街幅が廣くなつて路筋が餘程正しくなつたやふに見へますが、是れは市區改正とかの結果ですか

「そふです、大抵の町は幅が二十間となつて、都下十五區場末までも人造石を敷詰めない處が無いものだから、實に坦々紙の如しといふことになり街筋は丁度碁局の目のやふになりまじや

「田」もふ此邊も大抵御覽にツなつたやふだから、針路を西北に轉じまじや

ふか』と、舵を動かせば、駛空船は風に飛が如く駛りて、水に浮ぶかのやふに萬世橋邊の空中にて止りぬ。

第四回 駛空船市中の遊覽(中)

或は高く或は低く、多くの駛空が船空中を飛行くさま、その昔自轉車人車の街上を往來ふその如く繁く中には廣告的に種々の装をなし五色に彩りたるさへあり、彼處に意匠を凝らせる店開きの引札を撒きつゝ駛るあれば、此方には通信社員が船頭に仕掛けたる無線電信で百餘の新聞社へ通信しつゝあるもあり、通信社にて帝國、東京、自由電報、明治、の各社は早くより是れにて評判を取り、廣告社中にも正路喜、弘報、廣告、三成、金蘭、公正、日本廣告の各社は夜間船底に五色の電燈にて廣告文を見はし市中を巡行するの妙策で夙に喝采を博するなど、學理の應用も今はその頂點に達せるなり、夫人リツツンは米國文明の中心に生れたるなれど、此歐米の長に和風の粹を併せて作られたる優美なる大都府を見ては、見るもの皆異様の感にうたれざるなく、船上より下瞰して餘念なきはさもあるべし。夫人「アノ方々に寺院にある様な高塔が建て居

るは何でしやふ。』「サツと高い十幾層の黒塗で、東洋流のぐるりが開放になつて居るは、いろはの鳥獸肉料理店で、昔木村莊平といふ男が四十八店設ける積りで二十二迄出來て居つたのを、その後段々豫想の通りに殖して、又息子の代にアノ通り立派な建築をやりましたのですが、價が廉い上に滋養料理なものだから中々繁昌して居る、東の方は頗る高い美しいのが見へましやふ、アレは昌平橋の大弘告塔で、村井、江副、岩谷の煙艸店、三井、白木屋、松屋、徳海屋、堺屋、越後屋、伊勢丹の呉服店などが共同で建てたもので、夜に入ると花電氣の廣告が見はれて廻轉する、併かもそれが屢意匠が變るので非常に注意を惹ひて美觀譽ふるに物なしです、昔と違つて廣告利用の法は進だものです。』「皇居の此方にも大きなのが見えるではありませんか。』「左の大きいのが天賞堂の陳列場、右のが白井羅紗店と裁縫部とです。』「ハ、ア三十年前の大店は皆今にも繁昌です。』「當時何うての店は矢張時勢に伴ふて進だ結果、皆身代相應に進で居りますが、中には一小店の小僧で非常に勤勉の効が表はれて、たいした資産を作つて居るものも尠くありません。』と話半ばへ、ヒューと音をさせて大きな駛空船が傍へ飛び來つゝ、中から「ア、此處だ〜」と聲を掛けたのは風流商人と知ら

る、第十五徳海屋の主人平田健吉で、菊水煙草製造會社長内藤彦一、有名なる養豚家直井直次郎、品川銀行頭取池田孟雄、三井製絨所長大平市之助など何處よりかの歸途なるべく何れも旅装と見ゆたり。平「唯今お宿へ伺ひました、御遊覽と承り、色八搜してヤツと尋ね當つたのです。節「でした、それは失禮でしたな、がお揃で何處かへ往かれましたか。平「昨夜芝の紅葉俱樂部でフト富士登山の話が出来て、今朝早くから參つたが、今歸途に貴方をお尋ねしたらばといふことになつたのです。節「此處ではお話も出来兼ねるから、子一田野井さん何處かで慰まふじやありませんか。田「宜しい」と船側に備へたる無線電機に對ひたるが、少時して「上野の萬安に準備を通じて置きましたから、あちらへ參るとに致しませう、諸君もどうか御一處に」と、是より二個の駛空船は相並で上野に至り、不忍池畔なる萬安樓支店に下りぬ。

第五回 駛空船市中の遊覽(下)

都下で屈指の料理店は湖月、花月を始め萬安、松田、松本、いけす、三橋、竹葉、明ぼの、三宜、梅川、伊豫紋など今なほ昔の繁昌を承けて繁昌し、中にも萬安は各處に

支店を設けると十餘ヶ處にて爰處忍ヶ岡の麓不忍池の畔に和洋折衷の數奇を凝らしたる一構は、その昔木挽町本店に仕へしお八重といふ女中の代に至て設けしなり、百三十萬の人口より僅か三十年間にて三倍半に増し、四百五十餘萬となれる東京は、人口の増殖に従ふて市街は大膨脹をなしたるも、繁華は重に東南築港地の方面に移りたれば上野の邊りは夫れ程變りしさまもなく、十幾處の公園中なほ第一幽靜の地と數へらるゝ程なれば、その中にも幽靜を選びて構へたる此樓は閑遊雅宴に適せばとて田野井の注意にて案内したるものと知られたり、七人の一行は浴を畢へて湖水に枕める廣間にて小宴を開くこととなりたるが「日常は晝夜劇務に追はるゝ方々なれど、今日は半日の清遊を偕に致したいと、その準備をさせましたから」と田野井の何處までも届いた幹旋に、何れも其厚意を謝したるが、有弊は社交に長けたるの人にてありけり、その昔ならば斯る實業家の筈には、必ず業者といふもの缺さぬ習ひなりしに、公徳の殊に進みし今日にては醜業婦なんぞ招く者なく、またさる氣樂な痴遊をなす暇あるもの少なくなりたるは、是れ又世運進歩の賜ものに外ならぬなり、客は各好める二種三種の料理を命じ、酒嗜むものは生ピアを傾けつゝ、談は經濟に始まりて工業に移れるが

内 『工業上で殊に進んだは建築材の製造でしやう、三十六七年の頃に志賀農學博士が獨逸から不朽木の法を得て歸朝し、雨宮敬次郎が投資をして始めた、月島の不朽木製造會社の遣方は、當時の人は皆感じて舌を捲た位であつたが、今から願れば幼稚なものです、御覽なさい此柱や天井は皆江副八十太郎の江副製材會社の新製品で、木材の鋸屑に一種礦物の廢物を交せて、電氣力で壓搾して固めたものです、樫とでも杉とでも、松、檜何でも摸造が出来て、しかも價が廉くて決して腐朽などの憂は無いらうです』池 『それから煉瓦です子、大橋新太郎所有の川崎煉瓦製造所で製する萬年煉瓦といふのは、同地産の粘土に何でも臺灣から一種、越後から一種の至廉な原料を取寄せて配合して焼たもので、毀れず苦が付かず、耐火力が強いので需用が非常に多く、海外の注文に到底應じ切れぬといふ好況じやさうですが、立派な建築材が發明せられたものです子』直 『まだ驚くべき一會社が目黒に出來つゝあるのですが子、是れは各種の廢物を理化學を應用して紙に製するので、資本金一千五百萬圓の株式合資組織で山崎治資、小畑勝藏、淺野龜吉、金代芳次郎、古田與惣吉、野崎重三郎、藤田昌太郎、大久保大八郎、土屋森などいふ出來星紳士が大株主で、三十六年の夏渡來してミシガ

ン大學に入つて工科を修め、五年の後工學博士の學位を得た鈴木啓次郎といふ人を技師に聘し、長く北米の工業界で苦んだ山村靜軒が工業部、糸川由之助といふが營業部の支配人となるさうです』節 『ア、それですか私の方へも其鈴木といふ技師なら態々企業上の相談に來たどがありました、原料は主に甘蔗の搾滓、製材處の殘屑、米麥の糠などで、苟くも植物質のもので原料が多ければ材料にならぬものなしといふは感ずべきとです子、此會社は屹度儲かりますよ』平 『話頭がチト轉じますが直井さん、貴方は養豚に御熱心の極、新飼料を發見せられた爲め、餘程の御利益があるといふことを、諸新聞雜誌で伺ひましたが、如何なのです』直 『別に新發見と申すではありませんが、種々經驗の末、河海に叢生する藻類の中から好飼料を得たのであります、殆ど無代價のものだからマア利益になるといふ都合で……』田 『直井さんの養豚は都下は、愚か全國にもあれ程の大規模はありますまい、日々市内に供給する豚肉は中々たいしたものでありませんか』となみく注だピアをグート一息に傾けたりき、

第六回 上野公園の散策(上)

家庭に於ける食物調理の法進まざるを慨き、村井弦齋といふ小説家が食道樂を著はしたる當年とは事變り、割烹の法は今や非常に發達し、東京料理は巴里をも凌ぐと美食家をして稱へしむる程なるが、殊に萬安は調味の鹽梅に誇る丈けありて、箸をつくるもの風味の一も絶美ならぬはなく、平生豪奢なる節藏夫妻もその庖丁の美術的なるには深く感じたるやうに見へたり、やがて天井に仕掛けたる自動器に依りて金色燦たるアルミ皿に紅玉を溢るし許り盛りたるが食卓の上に運ばれたり、是れ此樓名物の一なる西瓜料理にて、植たるまじなる熟せる西瓜に穴を穿ちて、サンパン酒を注ぎ入れ、密塞すると一日許りにて摘み採り、凍氷器中にて冷したるを巴里仕上げのコックの手に調理せられたる珍物にてその昔山谷の八百善が鉢植の儘茄子胡瓜の漬物を出して、傳家の秘法と誇りたるに較ぶれば、これぞ數段の進歩なりけり、斯くて一同は午齋を了り、平田内藤等の勸むる儘に杖を忍ヶ岡に曳くに、木立の模様などをさして變らぬと西郷の銅像の傍には勝海舟、福澤諭吉、大隈重信、伊藤博文のも建てられて、都合五

つの銅像立ち並び、陶鑄の巧なるありし昔を語るかとも疑はれつ、大佛、清水閣もその儘なれど秋色櫻は枯れて跡なく、片岡子規の古碑も苦むして訪ふものなく、東照宮境内の五層塔は鬱茂たる老杉の間に聳へて昔なつかしけれど、哀れ彰義隊の墓は毀れかゝりて手向くる香華も少くなりぬ、一同は清水臺に立ちて東方を指し語らひつゝ

節 東洋の工業地といはるゝ筈です子、煙突から噴き出す煤烟實に雲の如しといひつべしだ 田 千束邊から寺島龜戸までは悉く工業者のみの集まる處で、昔の百花園近處が日本電氣磁石車會社の工場で、木母寺から隅田村邊が人造絹絲紡績會社の處在地です、その他大小の工場百を以て數へる位でありまじやふ 内 昔の石炭時代には斯ふ造工場はなかつたのでしたが、器械といふ器械は皆電氣及び磁石力を應用するものになつて、あまり燃料を要せぬから、斯く工場の勃興を促したのです、尤も世の需用が供給を促がしおしましたなれど 節 千住から本木附近も變つたでしやふ子 平 ハイあの邊は今では頗る殷賑です、確か四十五六年の交でした、市區改正が彌出來ました時藝妓とか娼妓などの醜業婦が市の中央に居つては、大に風紀に關はるといふ市會の決議から、醜業者移轉論が盛に起つた末、市内で遊廓を桐ヶ谷、谷山の二村と北千住及

び本木の此二ヶ處に限ったものですから、今では醜業婦の巢窟となつて居ります
 節 『ソレじや吉原も移りましたか』平 『新吉原も洲崎も共に移ったのです、御互が青年
 の時代までは市の目貫ともいはるゝ場所に、教坊軒を列ね妓院廂を接して婀娜たる嬌
 体白晝往來して人怪まらずであつたから時折不量見を起して、楚々たる風致の塵に魅
 せられたものもありましたが、今じや人が眞面目になりましたから、勞働社會のもの
 より外は遊ぶものが少くなつたのです』夫人 『アノ田野井さん直ぐ向ふに見へる高塔は弘
 告塔なのですか』田 『ハイ十五層のグツと高いのが廣告兼用の眺望閣で、下の低いのが
 淺草公園―觀音の五重塔なのです、もとは狭い陋穢い處でしたが、今から十七年前に
 待乳山といふ小丘を取込で川畔まで擴げたから、水を隔てゝ向島を望み四季の眺めに
 富だよい公園となりましたのよ』夫人 『都下では公園が頗る多いですよ』田 『先づよいの
 が淺草、築地、上野その外總て三十もありましたよ、近頃出來た目黒公園も幽邃な
 森林もあり清澄な園池もあつてそれは景致に富で居りますよ』節 『イヤ見るもの聞くも
 の皆懷舊の種ならぬはなしです、……サアちと奥の方を歩きましやふか』小池、田 『サア
 往きましやふ』

第七回 上野公園の散策(下)

指を偲ふれば六十餘年の昔、戊辰の變に兵燹に罹り、さしも壯觀を極めたる東叡山寛
 永寺も建聯ねたる堂塔伽藍烏有に歸して後、満山櫻樹を植て公園となせしが、星霜推
 移りて世の變遷太だしきも、爰處の風光は花の色松の緑と共に昔の俤を残すご嬉
 しく、屏風阪の慈眼堂、徳川の二靈廟古びたるもなほ舊態を保ち、清水谷の動物園は
 取擴げられて世界にあらゆる禽獸蟲魚集まらざるなく、門跡の舊邸といふ博物館は、
 六棟七棟大理石造の建物嚴かに内外古今の珍器標本備はらざるなく、宏壯なる圖書館
 の傍には美術、音樂等の學校展覽場幾個となく古松老樹の間に立ち並びて、爰處東洋
 美術の淵叢となり繪畫彫刻の精華を集むる處とはなれるなり、節 『三百幾十年の前に
 荒蕪を拓て、此大きな處を構へた天海僧正といふ人は中々豪いものです子』池 『今日
 で見ると是れ位の土工は何でもありませんが、廣袤數里の間野草茫茫たる荒源を拓い
 た當時に湖ぼつて見ると、佛屠の身で此土木を興して、惠を後昆に貽すといふは實に
 豪いものです』節 『此奥の天王寺も輪奐の堂宇は焼失したのだそうですが、墓石累々た

る三味原は淋しい處でありましたよ。』もとほそふでしたが、十年許前に市區改正の結果、色々喧しい議論があつて、地上に墓石を建てることが出来ないことになり、今は地下に隧道を穿つて墓地を作り、幾筋もくゞ鑛山の坑道のやふな道が出来て、死者を其處へ葬りて塔婆を建てるといふことになりました。『希臘羅馬の古へにはそふゆふことが行はれたを何かで見たやふでした。』夫人『大きな鐘の音が聞えます子。』直『私らの若い時分に『鐘は上野か淺草か』といふ謠が流行りましたが、それは此鐘なので、随分戀の道具に使はれたのです。』夫人『アノ佛蘭西風の大きな家は料理店か何ぞですか。』直『ハイ、精養軒といふ巴里風の料理屋で、曾て載振貝子といふ支那皇族の御旅館になつたことがあつてから評判を増し、數年の後に今の如く大きな建築が出来まして、此邊では万安に亞で、松源、伊豫紋、鳥八十、松月、長蛇亭、鶯春亭、暢春閣などと、借々上等の旗亭です、暢春閣といふはコノ大きな割烹店で、今日は岩井友士といふ人の催しで、先日來喧しい問題になつて居つた、磁力鐵道派の集會がある筈ですが、大株主中出澤菊之助、水田耕吉、橋本鐵三、林秀長、小野原米三郎、松本清七、小倉房吉、木村玉三郎、藤田莊五郎、高見澤榮助、細腰泰要などの議論家が寄つて居るだらふと思ふのです。』

○「向ふの縁陰に小倉房吉、永田金之助、杉田儀市の三人が密話して居るが、皆五百株以上の大株主だから、矢張寄合の仲間でしやふ、磁力派と非磁力派と競争の際であるから頗る議論に花を咲かせるだらふと思はれますよ。』今日寄つて居る人達は青年時代までは、さまで名を知られて居らなかつたのですが、艱難汝を玉にすといふ言葉を服膺して非常に勉強したが爲め、今では皆餘程の丸持に仕上げて居るが、是れで見ると男子須らく勤勉なれです子。』内『カー子ギーも、モルガンも、ロスチャイルドも岩崎も、素はみな徒手空拳で飛出し、勤め振り、働き振りがよかつた結果、彼の如く巨産を積たのですから子。』池『現に竹田さんも今日の成効を得られたのは、堅忍不拔の氣性に兼て非常の奮勵であられた酬です、私は昔日本商家同志會に加盟せられた同志諸君が揃ひも揃ふて成効せられた者が多いのは皆その平素心掛けが善かつたからであると思ふのです。』節『私は自家の経験から申すが、艱難すべき時に好で進で艱難せざれば、とても大業は成し遂ぐることは得られぬです、それで小年子弟にはつねに此語を繰返して申して居るとなのです。』田『もふ時刻も大分移りましたから如何です歸りましては、船の準備はさせてありますから』

第八回 芝商品陳列所の服装談

都下各處に設けられたる商品陳列所は、縁日の露店を集めたる如き昔の勸商場などは違ひ、屈指の豪商が聯合小賣店とせる大規模のものにて、殊に今は熱鬧の巷とされる芝公園にあるは、小博覽會ともいふべき繁昌にて、商ひ振りは英國風に法り一に廉價を旨とすれば、顧客の群りて日夜雑踏するも無理ならず、竹田夫人リッツンは伯爵夫人江副静子に誘はれて、今日芝濱館に午齋の饗を受けて後、相携へて爰に蓮歩を擡げたるが、その楚々たる風致は轉た滿場の視線をあつめ、中にはひそく彼は頃る歸朝せる南米鏢山王の夫人なり、世界の金傑モルガンの娘なりと耳語くものありたるは、エス竹田の成功談が如何に都人を感じせしめ、その歸朝が如何に社會を驚かしたるかを知るべきなり。『旨く陳列が出来てますと子、妾も歐米は此頃で丁度四度ばかり巡遊しましたが、商品の陳列場としては頗る完備して居る方と思ひますよ。』『そふでありますよ日本固有の美術を應用した處は何とも申やうがありません。』『コチラは有名な菓子屋の出品です、鹽瀬に榮太樓、大きな青貝の看板が掛つて、下に色々美し

い瓶入が並で居るが壺屋、それに岡野、田月堂みな美しく揃ひ。『右手が例のチョコレート糖の青柳にビスケット屋の風月ですよ、まだ向ふに奇麗な陳列があります子。』『近頃賣出しの三河屋ですが、此處に出て居るは皆菓子屋の巨臂ですよ、此方の雜貨店を御覽なさい。』『コレハ齒磨屋です子。』『ダイヤモンドの平尾、花王散の波多ライオンの小林何れも衛生齒磨として知らるゝ家です。』『妾が購ひました洋傘屋の柏屋からも出してますよ。』『傘は先づ坂本仙女香と此家が精巧なものを賣り出すといふ評判がありますのです。』『この洋雜貨店は確かに名を聞かれましたが……ハテ……そふく華盛頓で逢つた高橋作次さんが昔お勤めなされた家と聞きましたの。』『あまり多くつて一々は見られませんかよ、向ふの呉服店を御覽になりませんか。』『一寸お待下さい、少し見たいものがありますから』と、美術室に入りたるが、爰處には吉沼服部、天賞堂、玉屋、伊勢伊と、何れも優美なる貴金屬の裝飾品を飾り立てし目も眩やむ許にて、リッツンは天賞堂にて寶石入の指環、吉沼にて襟飾など購ひて、夫より呉服室に移りたるが、兩側に飾を凝らせる三井、大丸、松屋、白木屋を始め十餘呉服商の小賣店相並で綺羅を争ひ、中にも大橋屋は主人大橋治三郎が里昂にて腕を鍊ひし

効現はれ、色彩の配合より陳列の工合他に比ひなく、松屋は「商ひは高利を食らす、正直に客を迎へ」との家憲を格守し、爰處にても質素をつとめたるも、名代の店として客足繁く、伊勢丹か今は別家なる眞壁柳三が歐風好きに任せ、多年の苦心にて發明せる改良服を夥しく飾りて、之を測電器にて間斷なく廻轉して顧客の眼を驚かし、その傍には今なほ國風を守り、粹に粹を重ねて獨り誇れるエリ治の半襟店、又向ひの徳海屋和洋服店は堆く積上げたるもの、柄行の斬新と意匠の絶美にて華客の羨ふなど、孰れ劣らぬ場内の繁昌を爰に蒐むるかと思はるゝ許なり、大橋屋の主人治三郎は二夫人の來觀せることを店員よりの電通にて知り、急ぎ自働電車にて駛せつけたるが、今しも二夫人はその店頭にて服地など購ひつゝありける折にてありしが、治三郎は直に喫茶室に請じて款待しつゝ「今日は貴夫人の御來場を得て辱なく存じます、何かお氣に召したものが御座いましてしやふか」「設備から裝飾實に感ずる外はありませぬ中にも改良服の色々、風儀上衛生上から申しても御同業者率先の効は謝さねばなりません」「貴方なり昆翁介、湯淺辰彦、出澤菊之助、小管丹次、眞壁柳三、田村彌七、内藤彦一等諸君のお力で漸く改良服が實行されることになりましたが、妾は婦人社會を

代表してお禮を申さねばなりません」「此服装改良は第一眞壁さんが熱心に唱へられ私も里昂に參つて取調は致しましたが、これは畢竟同業中の先輩が、時世の進運に鑑みて盡力せられました結果であつて、私共は何の効もありませんので」「妾が二十一歳の時、雙親に連れられて始ての外國行を致した時、既に早く服制は改めて貰たいと存じましたか、漸や五七年前から改めかゝりましたのは、衣食住の中で衣だけが餘程遅れましたと子一「妾は貴女方が長い袖を翻へし大きな帯をめて居らるゝを見ますと、衛生上は兎に角、風裁の上から申しても何となく人格が落るやふに思ひますよ」「だがあの時代は社會進歩の程度ではアレが宜しふございましたのですハハハハハハ、」「フハハハハハ、」

第九回 湖月樓の園遊會(上)

今より二十七年前米國にてアルベルストーン博士が苦心に成れる電氣磁力車は、列車に強力なる電氣磁力車の装置あり、鐵軌の下部に沿ふて流動し、列車を鐵軌上より持ち揚ぐる仕掛となり、一時間能く三百哩の速力にて駛走するの大發明なれば、歐米各國

政府より發明專賣權を得たるが、デラウエア、ラックカワナ及びウエスタアン等の諸鐵道先づ之れを採用してより、その法續で各國に行はれ、我邦にても明治四十五年より日本鐵道トラストは此式を用ゆることになりてより昔は十四五時を要したる東京大阪間も、僅かに一時間にて駛走するの便利となり、又江副博士が十年前に發明せる駛空船も三時餘もあれば大阪までは飛行する快速力を有する時代となりたれば、國內を旅行するも實に容易なるに至れるは、これも科學の賜に外ならざるなり、節藏夫婦は明朝新築地停車場發中央電磁列車にて、京阪地方に出發し、暫くは運河會社の開鑿工事を督せらるる筈なれば、田野井、直井、大宮、大橋、平田、池田、大平、片桐、野村、山崎、野崎等の數人發起となり、今夜臺地通七番町なる湖月樓の庭園にて歡迎大園遊會を開くこととなり、豫め節藏が日本商家同志會員たりし時代の舊友より、各地に於ける事業上關係の筋々へも案内狀を發したるが、時刻までに或は駛空船にて或は自動電車にて、電氣船、電磁列車等にて來會するもの八百餘名に達し、來賓の休憩所に宛てたる、さしも廣き湖月の樓上樓下も立錐の地なきまでにてありしが、やがて午後七時となると共に、金代芳次郎、小崎熊吉、佐々木萬三郎、高島良象、村井捨吉

等より寄贈の五彩電氣球の空中に放ちたる駛空船に點せらるるを合圖に、來賓は會場とせる庭上集りたるが、田野井は起て「私は發起人を代表して、聊か本會を開いた趣旨を述べましやふ」と、節藏が渺たる徳海屋洋服店の小僧から身を興して、千辛萬苦を辭せず瘴霧の中を怖れず、無人の荒野を開拓し、進んで有益なる發明をなし、て資本を得、なほ進で遂に南北亞米利加に於ける大鐵山王となり、世界有數の金傑モルガンの知る所となり、その五女リツツンを娶るに至るまで成功せるは、獨り我舊同志の光榮なるのみならず、我日本の光榮なり」と論及し、終に於て「商界の青年はエス竹田さんの風を聞いて起り、その行を模範として奮勵せられよ」と最とも熱心に辯じたるに亞で、出澤菊之助進み出で「私が平田君と共に徳海屋呉服店に管店たりし時、竹田さんは我本店から秘露へ向て發途せられたが、その當時からして堅忍不拔なる人にてありし」と、今日の成功を得られたるは偶然にあらずと斷じ、斯の如き偉人を出せしは、實に我本支店無上の光榮なることを劃切に辯じたるが、節藏は顔半面の美髯を掀りつゝ微笑を含で起ち「不肖は唯當初志せる處を、聊か勤勉の酬ひにて達せし迄にて、自から未だ世に誇るの功なきを耻ぢつゝあり、然るに不肖の爲に斯く盛宴を張

られ、種々の讃辭を賜るは、身に餘る望外の光榮なり」と一揖して退けば、飯沼彦太郎は喜びの餘躍り上りて「竹田鑛山王萬歳」と大喝すれば、衆之れに和して萬歳を唱へたるの聲、遙かの海に響き渡りぬ、斯る時に長崎升三、岩谷松藏、吉田市恵、松平彌三郎、毛塚保太郎等より贈りたる瓦斯煙火は種々の色にて「君が舊友は南米の鑛山王を迎ふるを喜ぶ」、「エス竹田君の健康を祝す」、「進で世界の大人傑たれ」などいふ文字を見はし、満場白晝の如く明かくなりたれば、衆また歡呼拍手して止まざりき、これを第二の合圖に、假山の彼方、園池の此方に設たる賣店にて、來賓はビア店に至れば豫て渡されたるビアの符號を印せる小牌を機函に投ずれば、自働器に依りてピア運ばれ、林檎糖の小牌を投ずれば青柳特製の菓子にして菓實の味ある新菓運ばれ好むもの欲するもの、自働器に依りて運び出さるゝに、來賓は思ひゝに食ひ且つ飲みて樂みつゝありたる時、空中より活火炎々たる一大球は來賓の頭上に向て俄に墜ち來れり

第拾回 湖月樓の園遊會(下)

アハヤ來賓の頭上に墜ちんとせし大火球は、二十ホールの中空に停りぬ、それと共に活火はだんゝに消へて五色の光彩を放つの一風船を現じ、之れに乗れる一個の嬋妍なる美人は、手にせる紙片を來賓に向て投じたり、是れ發起人が新意匠に成れる福引券にして「諸君は歸らるゝに臨で、各此券一枚を受付に出し、その番號に符合する景品を受取るべし」と記されたり、投じたるや美人を載せたる風船は見るゝ大空に上り、船底に「來賓諸君萬歳」の文字を示しつゝ、大空遙かに上りたるが、來賓は手を拍ち聲を擧げて又も萬歳を叫びたり、やがて啾啾たる音楽は樓上の一隅に起り、餘興室に宛てたる樓下に白髪の一翁見れたるが、是れぞ今日まで青年實業家の機關なる日本商家同志會の創立者松永敏太郎その人にて「今日はその昔我會の爲め盡力せられたる同志中、孰れも幾多の勞苦を積まれ、竟に能く成功せられたる諸君の、斯く多數に打揃ふて會合せられたるは、實に空前の快事にて、席末を汚したる不肖敏太郎の身に取りては、寔に無上の光榮なり、仍て不肖は爰に竹田君及び來會諸君の健康を祝し併せて十分の快樂を竭されんことを望みます」と挨拶し了るや、頃る伯林より歸れる桃川遊仙の講談あり、米人ローマンの落語あり、印度人ヨーレー一座の手品あり、最

後に吉水壽翁の平家琵琶の彈奏ありて、衆賓歡呼の間に散會したるが、翌朝の『商日本』新聞は詳に當夜の景況を報じたり、今その一節を摘すれば左の如し

日本商家同志會長老連の催にかゝる、竹田節藏氏歡迎大園遊會は昨二十五日午後七時より築地區臺場通七番町湖月樓本店の庭内に開かれたり……

等種々の餘興ありて散會せしは十一時半なりしが……來會せしは八百餘名の多數に上り、關東各地は勿論遠く關西地方よりは態々來會せし人多きも、何れも當世知名の紳士連なれば、格別の混雜なくして終りたるは……

當夜來會せし重なる氏名は左の如くなりしといふ

- | | | | |
|---------|---------|--------|--------|
| 長野縣總代 | 白田 卷次君 | 倉橋 雲則君 | 天野 安吉君 |
| 丸山三郎君 | 宮澤 安吉君 | 白澤島之助君 | 平林 時助君 |
| 柳澤 金藏君 | 山川 儀三郎君 | 淺岡 捨吉君 | 六波羅繁男君 |
| 大島善右衛門君 | 市瀬 文三郎君 | 宮井 義一君 | 中島 徳一君 |
| 小池利右衛門君 | 市瀬 藤太郎君 | 落合 熊吉君 | 橋本 雄三君 |
| 栃木縣總代 | 君島 平治君 | 中村 金作君 | 山田 政平君 |
| 飯塚三郎君 | 杉山 順君 | 青三 春吉君 | 内山 國八君 |
| 杉山 春吉君 | 川島 金次郎君 | | |

- | | | | |
|---------|---------|----------|---------|
| 須藤 新作君 | 中村 房次郎君 | 川田 幸次郎君 | 山野 井政吉君 |
| 新潟縣總代 | 武田 直吉君 | 山川 聆次君 | 波邊 榮太郎君 |
| 吉田 藤作君 | 田中 仁三郎君 | 小島 由平君 | 吉田市次郎君 |
| 宮島友三郎君 | 源川 萬次郎君 | 五十嵐 萬次郎君 | 五十嵐 寅造君 |
| 清水 良助君 | 田 久吾君 | 丸山 富次君 | 田中 藤一君 |
| 鈴木 清七君 | 江口 達太郎君 | 柏 佐一郎君 | 白川 直吉君 |
| 梅川 爲作君 | 宮原 彦作君 | 横山 盛君 | 花輪 伊之吉君 |
| 北川 庄八君 | 遠藤 嘉藏君 | 田崎 政次郎君 | 富山 富次郎君 |
| 岩越源太郎君 | 瀨山 幸一君 | 高橋 仲重君 | 中田 秀吉君 |
| 埼玉縣總代 | 本間 純次君 | 米山 秀吉君 | 坂上 坂平君 |
| 岡野 貞次君 | 今井 彌市君 | 町田 稻太郎君 | 杉田 愛吉君 |
| 諸商店主人 | 吉江 勝次郎君 | 安田 利兵衛君 | 山口 平助君 |
| 徳野 六喜君 | 田野 村半衛君 | 牧 觀光師君 | 綾部 安雄君 |
| 大分縣總代 | 井口 清君 | 森 徳藏君 | 島津 邦三君 |
| 河野 成章君 | 伊東 辰次郎君 | 茂原 福多君 | 長坂 敬太君 |
| 群馬縣總代 | 増田 善次郎君 | 小林 利太郎君 | 秋山 國太郎君 |
| 熊井 幸吉君 | 金山 淺吉君 | 上和田 彦七君 | 小山 淺次郎君 |
| 齋藤 龜吉君 | 山崎 正次君 | | |
| 高橋 善太郎君 | | | |

内沼岡吉君	鈴木重作君	水口廣次君	井上善太郎君
神奈川縣總代	丑田兼松君	高山文造君	本間彦吉君
小林輝之助君	杉田愛吉君	本田才吉君	
北海道廳總代	小口一太郎君	望月宗作君	増田茂吉君
戸羽亨君	對水正吉君	高木重助君	鈴木泰二郎君
靜岡縣總代	伊藤賢次郎君	山下德太郎君	多田民藏君
德島縣總代	花野操君	文次郎君	
千葉縣總代	千葉縣總代	鶴岡充君	渡邊平吉君
暹美信太郎君	石原鐵四郎君	安川清吉君	根本三太郎君
岐阜縣總代	西野清一郎君	田村佐一郎君	西部年造君
大森和一郎君	佐世保市總代	李保村三郎君	武滿嘉藤太君
滋賀縣總代	中村勇次郎君	不破豊吉君	西村源三郎君
京都府總代	宮城縣總代	森野與右衛門君	奥井助三郎君
金子長作君	關正人君	木村日暎君	中野勝造君
石橋源左衛門君	竹内録之助君	北川幸七君	竹内嘉兵衛君
茨城縣總代	愛知縣總代	中島宗法君	小田爲三郎君
福島縣總代	石川縣總代	秋田市總代	青池京助君
青森縣總代	大阪府總代	神戶市總代	藤森政雄君
茨城縣總代	韓國總代	山梨縣總代	渡邊爲次郎君
愛知縣總代	東京府下郡部總代	三ッ木文次郎君	島田泉君
中島宗法君	橫濱市總代	大村喜一君	星野安太郎君
金子長作君	伊澤信次君		板倉重助君
關正人君			田中文二君
木村日暎君			向田半七君
竹内嘉兵衛君			
小田爲三郎君			
青池京助君			
藤森政雄君			
渡邊爲次郎君			
島田泉君			
星野安太郎君			
板倉重助君			
田中文二君			
向田半七君			

三十年後の東京上巻終

三十年後の東京上編附録

◎大隈伯の商家青年に對する意見

(上野公園雇人獎勵會場に於ける演説)

東京市は畏くも 陛下の御膝元で、全國商業の中心で有る、然るに此商業なる者は、主人のみを以て行へる者でない、必ず多数の雇人を要し、主人と雇人の共同事業でなければならぬ故に雇人の獎勵は商業を振興せしむるに最も必要な事である▲人は必ず働く可き者で、労働は神聖で有る、何の職業でも職業に貴賤尊卑はない職業は神聖である、官吏でも醫師でも辯護士でも皆働いて報酬を取る者で公共の雇人で有る、諸君と同じく働いて報酬を取る者である、職業に貴賤尊卑はない、労働は神聖で有る▲人は生れながらにして富める者ではない、試みに世間を見られよ、百年永續の富家があるか、富家の子にても獨立して働いて報酬を得る決心がなければ、忽ち衰へて貧民となる、皆自分の決心を以て働いて、それを積んで富むので有る、實は常にソコに在る、諸君が働いて之を取ると取らざるとは唯夫れ諸君の決心に在るので有る▲否、諸

君が能く働けば、諸君が入用はないと言つても富の方から諸君を追ひかけて来る、自然に富む様になる、今日米國の鋼鐵王と謂はれる富豪のカーチギーも、其の父はスコットランドの鍛冶屋で有つた、鍛冶屋の息子が能く働いて今日の富豪となつたので有る▲又之を一國の上に如何なる結果を及ぼすかを考えて見ると、實に諸君の労働は國の力である、諸君各個の労働が集まつて國の力となる、國の強弱は實に諸君の働き如何に在る、世界の富國たる英國の富は、誰れが作つたか、實に諸君と同じ英國の雇人が能く働いた結果ではないか、米國も獨逸も佛國も其の富めるは、皆労働者が能く働くからで有る▲余は諸君に向て労働者に必要な五個の條件を申述べ即ち第一は正直で有る、正直でなくば立派な労働者ともなれず、富むことも出来ない、第二は忍耐で有る、能く辛抱しなければならぬ、度々主人を變更し職業を變更する様ではイカぬ飽迄も正直にツライ所も能く辛抱しなければならぬ、第三は敏捷で有る如何に正直で辛抱強くてグツでは仕方がない、即ち敏捷にスバシこくなければイカぬ、第四に勉強で有る、正直で忍耐で敏捷でも、職務を能く、勉強しなければ、良い労働者とは謂はれない、第五は朱斷で有る、時機を見て能く斷ずると云ふ性質かなければならぬ▲

尙此外にも労働者に必要なる性質が澤山有るが先づ此五條件だけを數へて置く、余は此の貧富の調和即ち主人と雇人の調和と云ふ事を望む者で、諸君が立派な労働者となつて、能く働き、それから追々大商業家大製造家となり、而して此の國の力を増し、此國の富を増し、以て此の日本の帝都の雇人たるの耻ぢざる様に務め、各地方の雇人も、諸君が美風を模範とする様に致したい、是れ實に諸君が各個の爲めに務むべき所なるのみならず、又此國に對する諸君の責務で、此の國の富むことは世界の富の増す事で、即ち世界に對する諸君の責務である

●商家青年禁令十六ヶ條

(米國成功雜誌掲載)

(一) 煙草を喫する勿れ

婦人の前で煙を吹くのは失禮として素より禁じてあるが、兎に角煙草はいづれの點から考へてもよすがよい物を買ひに行くとき、煙草の火を付けるまで手代は夫れに氣をさらされてゐて、返事もせぬので、腹を立て歸る客もある。これで成功のあらう筈がない。

(二) 雑談に耽る事勿れ

今日は常陸山が勝つたとき、明治座が面白いとか、増町に首く、りがあつたのとき、雑談を商賣よりも大事に

して、客があれを見せる、これを見せるといふをうるさがり、甚だしきは客に對しながら、自分も半ば膝をれち向けて、それからしどたいなといふもある。其時の客の不愉快さ！またこんな店へ來ものか！

(三) 客に失禮なる事勿れ

店によりては客が來ても御辭儀さへ確だませぬがある。それよりも、五十錢の物を四十錢に附けるさ、へん又も願ひ申ませうなど、鼻であしらつたり、直段が高いといふさ、手前の店には仕入物なんざあ無いんですから、品物をも見分けなすつて下さいなんぞ、實に癪に障るものである。何よりもこれで得意を減らすのだ。

(四) 客人の衣服につきて兎角言ふべからず

まさか聞える程の聲でいふもあるまいが、随分隅の方でこそくやるもので、それがまた意地悪く聞えるものだ。自ら服装の悪い事、其他の缺點を知る人は、人の己を視るを見ては實に不快の感を起すもの。かの客人が店頭に居るをも關はず二人三人打ち笑ふのもいやな感がするもの、謹むべきである。

(五) 下品なる言葉を遣ふべからず

誠に婦人に對しては注意すべきもので、ソンサイな言葉を遣はれるさ、どう思ふても侮辱して居るもの、輕蔑して居るものシカ思はれない。

(六) 客が商品を検査する時能々氣を付けて注意すべし

奉公人が商賣に身の入らぬは、自分の商賣と思はず、損か立たうが人の責任、利が有らうが人の得と思ふふり出るので、皆主人と自分の公同の營業と思へば決して商賣に疎になる筈はない、其心持が働きに現はれて

来れば、主人さといつまでも一通りの雇人を棄て、置く譯には往かないのである。

(七)最も安直の物を最初に見せる事なかれ

兎角懐は出し惜まれるもので、あるが上にも安い物を買ひたいが人情、初めに最も安いを見せて仕舞へば其下になりすまされれば時出す物がないので、それでは又なご、賣損ひになる。こゝらば大に秘訣として心得置くべき所であらう。

(八)鉛筆又は鉄を互に借借すべからず

時間も不経済、事も面倒、自分は必ず自分のを使ふ事として、丁度置所を極めて置けばそんな必要は無い。双方入用の時は一方は客を待たせて置かねばならぬでないか。之れが客を失ふ一原因になるのだ。小事が大さは此事だ。

(九)一分間たりとも汝の受取帳を失ふ事なかれ

呉服店の所謂取帳、などもこれ、やはり置き所がわからぬ爲めに、又は他の手代が使つて居る爲めに、客を待たせるやうな事があつては、永久の眼から見ても其の不利益の結果を來す事幾何であるかわからないのである。

(十)賣上仕切書は一つ書にし、字體も明瞭にせざるべからず

例へば三品五品を賣つた場合に、甲が何程、乙が何程と書き分けて置ければ、第一客が後になつて氣に入らぬ爲返却に來た場合、買戻すへき價格に争が起る、其後他日に至り、客の方でも、店の方でも、或一品の賣買直段を知りたい事がある。そんな必要の起つた場合に、總計で書いてあると見當がつかぬ、だから凡て事

務は丁寧、綿密で、そして敏速なるを賞ぶので、手をぬいてあつて早いのは何にもならない。それから字體は勉めて明瞭なるを賞ぶ。或る種の商人は分からぬ字を書いて却て得意として居るが、これ等は大變な心得違ひで、何の爲めに仕切書、請求を書くのだから、譯が分らなくなる。これらは充分注意して貰ひたいものだ。

(十一)協働の必要を思ひ、ゆめにも朋輩を妬み不和を生ずる勿れ

同じ年月勤めて居ながら誰某は二度も昇給したが上に、休暇も餘計に貰つて居る。主人は全く依姑最賃だなど、第一に主人を怨み、夫れさいふも彼の男が胡麻を摺るからなど姑んで見たりするは有り勝の話。一歩進んで、人が昇給して己が昇給せぬ次第を公平に考へて見れば屹度争はれぬ弱點が自分にあるか、抜んでた長所が一方にあるのに相違ない。年功などは實業界には勿論問はぬ事。悔しければ自分も勵むか第一。

(十二)業務時間中に新聞等を讀み手紙等を書くなかれ

ケラハムの處世教訓中、愛子を戒めて曰く「其中間の時間に至ては余が御身より買取り置きたるものなれば御身の時間も取も直さず余の金錢なり。故に御身若し私用を達せんが爲に之を用ゐなば、是即ち一種の小窃盜に非ずして何ぞや」と。日本人の店頭、小窃盜罪を犯すもの幾何?

(十三)常に忠實なる心を有し、お目先忠義を勤くべからず

陰でする事が案外に聞へるもの、それが目の前の働きぶりと相違するときは、一層甚しく信用を失ふものである。

(十四)誤りたる自尊心の爲に正直なる労働を卑しむ勿れ

労働神聖と稱せらるゝ米國にすら此禁言が重く見られて居る。況や般様主義、慢手主義、願使主義が尊ばれ

3720
53

36006

京 東 の 後 年 十 三

附 錄

四十二

働くのを却てユセクするといはるゝ日本に於てをや。

(十五)余はかゝる仕事の爲に雇はれたるに非ずと思ふ事勿れ

カーネギーは曰つて居る、成功するには、自家の義務よりより多くを爲す事を要す。餘計の事をして早速報酬は貰はぬにしても、將來の昇進の素地となり、或は他へ轉動の時の紹介状に頼はれて来る。人はまさに他人をただては使はぬものさ。

(十六)忠實、才幹、勇氣、忍耐、主義、以外に於て昇給を望むべからず

血縁、門閥、賄賂、情實によりて人材登用の門を塞げる日本の實業界にして無理かとも見うる注文ながら、やがてはかうなるべし。少くとも君君たらずとも臣臣たれで雇人は此覺悟なかるべからず

此禁令書を読み、再讀し、三讀し、反覆熟慮し、而して實行し、朝夕夢寐、常に之を忘るゝ事なかれ(實業の日本)

「三十年後の東京」上編附録終



明治三十六年九月七日印刷
明治三十六年九月十日發行

金拾五錢

編輯者 松永敏太郎
東京市京橋區木挽町六丁目三番地

印刷者 天野耕一
東京市京橋區三十間堀二丁目一番地

印刷所 明教社
東京市京橋區三十間堀二丁目一番地



發行所

京橋區木挽町
六丁目三番地

商 日 本 社

▲本會は又一般訴訟事件の辯護及出訴の代理事務を取扱ふ
 ▲通信書は平易婦女子にも判り安く認む万一意義不明の時は
 何回にても無料質問することを得
 ▲鑑定料は民事、刑事、行政の別なく一件金一圓とす但輕易事
 件にして端書應答は一件金五十錢とす
 ▲料金は鑑定依頼の申込と同時に郵便小爲替にて添附さるべ
 きこと照會質問は返信郵券を添ゆること

東京市京橋區木挽町六丁目三番地

日本法律通信協會

理事 松永敏太郎

法學博士辯護士 江木 衷

法學士辯護士 鹽谷恒太郎

衆議院議員辯護士 上原 鹿造

合議顧問



懷中傘 此傘は疊めば一尺となり
 佛蘭西形 流行傘種々
 里昂製紋織綾絹張傘種々
 同レース織込張傘種々
 舶來木柄細卷傘種々
 本店製造新形琥珀紋形種々
 新形リボン玉形飾り付傘種々
 細卷皮袋付傘種々

吾徒の趣旨を述べて
同志を募る

近時商業立國を呼號する新聞雜誌續出すと雖未だ商家青年子弟及雇人に同情を寄するもの一も無之常に甚遺憾とする處なり然るに不省敏太郎は曩に報知新聞に在つて雇人獎勵會を發起せし因みあり旁々舊冬より一般商家の青年子弟二千七百名と共に商家同志俱樂部を組織し一は之れが缺所を補ひ一は實業界に聊か貢獻せんとし又これが機關として「商日本」てふ週刊新聞を發行し無代同志に頼ちつゝあり其主義要領は

「未來の大商人たるべき青年子弟を鼓舞振作すること」
「商家の青年子弟が現在の立場を明かにし其義務を完ふせしむること」
「商家の主人と雇人との關係を徐々圓滿完備の境に進ましむること」
「青年商家をして互に氣脈を通せしめ相勵み相進むの蔗境に入らしむること」
等なり然るに本紙生誕日尙淺く號を重ねる僅かに七回なりと雖時勢の要求に投じたるが故か頗る江湖の歡迎を受けつゝあるは吾徒同志の喜びに堪へざるもの尙此上本部の趣旨を賛成せらるゝ商家主人、商家青年及雇人に向つて切に入會を希ふ

東京市京橋區木挽町六丁目三番地

商家同志俱樂部幹事
「商日本社幹」 松永敏太郎

●日本商家同志會規定

- 第一條 本會の目的は商業上の智徳を修養し改善發達を期すること
第二條 本會は全國商家主人及雇人又は商業熱心家を以て組織す
第三條 本會の事務所を東京市京橋區木挽町六丁目三番地商日本内に置く
第四條 本會の會員を分ちて左の二種とす
一、名譽會員 本會の經營及擴張上に功勞ある知名實業家
二、特別會員 一ヶ月以上會費納入し且本部功勞ある同志會
第五條 本會へ入會せんとするものは會費三ヶ月以上を添へ直接本部に申込まるべし
第六條 本會費は一ヶ月金五圓とす
第七條 本會互報研究娛樂の機關として月二回若くは三回商日本を發行して無代會員に頒つ
第八條 本會員は商日本紙上へ自己の意見を投稿する權あるものとす
但取捨は記者の隨意とす
第九條 本會費不納の時は商日本を發送せず
第十條 本會の体面を汚損する所爲ありたる時はその氏名を掲げて除名す
第十一條 本會事業擴張のため市内及樞要の地方に支部商議員を置く
但商議員 品行方正商熱心にして本會に功勞ある人を推選す
第十二條 商議員は年少なも五回商況其他會員の動靜を通信且勸誘の義務あるものとす
第十三條 會會員にして望の向へは會員證及會員徽章を頒つ
但實費金二十圓を要す
第十四條 本會へ加盟六ヶ月後に於てその會員が二ヶ月以上の病疾に罹りたる時は役員會議の上相當見舞の金を贈與する
第十五條 同上死亡せし時は弔文を贈與し本會代表者葬送の式に列するものとす
但遠隔の地方は弔辭に送付す
第十六條 本會は毎年一回大會を催すの外時々茶話會を開催するものとす
但其時日場所は其都度通告す
第十七條 本會旨にして住所職業を變更したる時は其都度報告せらるべきものとす
第十八條 一人にして會員勸誘廿名以上に達したる時は謝狀に添へて功勞を送呈す

商日本社寄書家芳名

東京朝日新聞記者 薄記精修學館長 實業時論記者 近事畫報主筆	東京朝日新聞記者 權藤	同 森	同 矢野	同 北川	同 鹿島	同 畑尾	同 佐瀨	同 福良	同 淺田	同 上島	帝國大學教授 報知新聞主筆	鳥居龍藏君	東京市部長 田川大吉郎君	東京博文館 鳥谷部春汀君
德島毎日新聞記者 大分新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	近事畫報記者 文學士	近事畫報記者 文學士	青木浦野外君	杉浦宗太郎君
東京新聞記者 報知新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	近事畫報記者 銀行員	近事畫報記者 銀行員	成川宗太郎君	飯田規矩郎君
福島新聞記者 報知新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京新聞記者 長崎	東京新聞記者 長崎	永島太明君	藤崎胡蝶君
京都新聞記者 報知新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京新聞記者 東京	東京新聞記者 東京	首藤貞吉君	半佛吉君
大阪新聞記者 報知新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京新聞記者 東京	東京新聞記者 東京	山崎半佛君	三上寄風君
京都新聞記者 報知新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京新聞記者 東京	東京新聞記者 東京	須藤寄風君	相馬可南君
東京新聞記者 報知新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京新聞記者 東京	東京新聞記者 東京	原澤豐城君	宮川欣堂君
東京新聞記者 報知新聞記者	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京新聞記者 東京	東京新聞記者 東京	澤原豐城君	宮川欣堂君

神田鍛冶町卅四

今川橋角

松

松屋吳服店

古屋徳兵衛

(電話本局六八八番)

二階總陳列場縱覽御隨意

よせ切見切反物澤山取揃

有之候



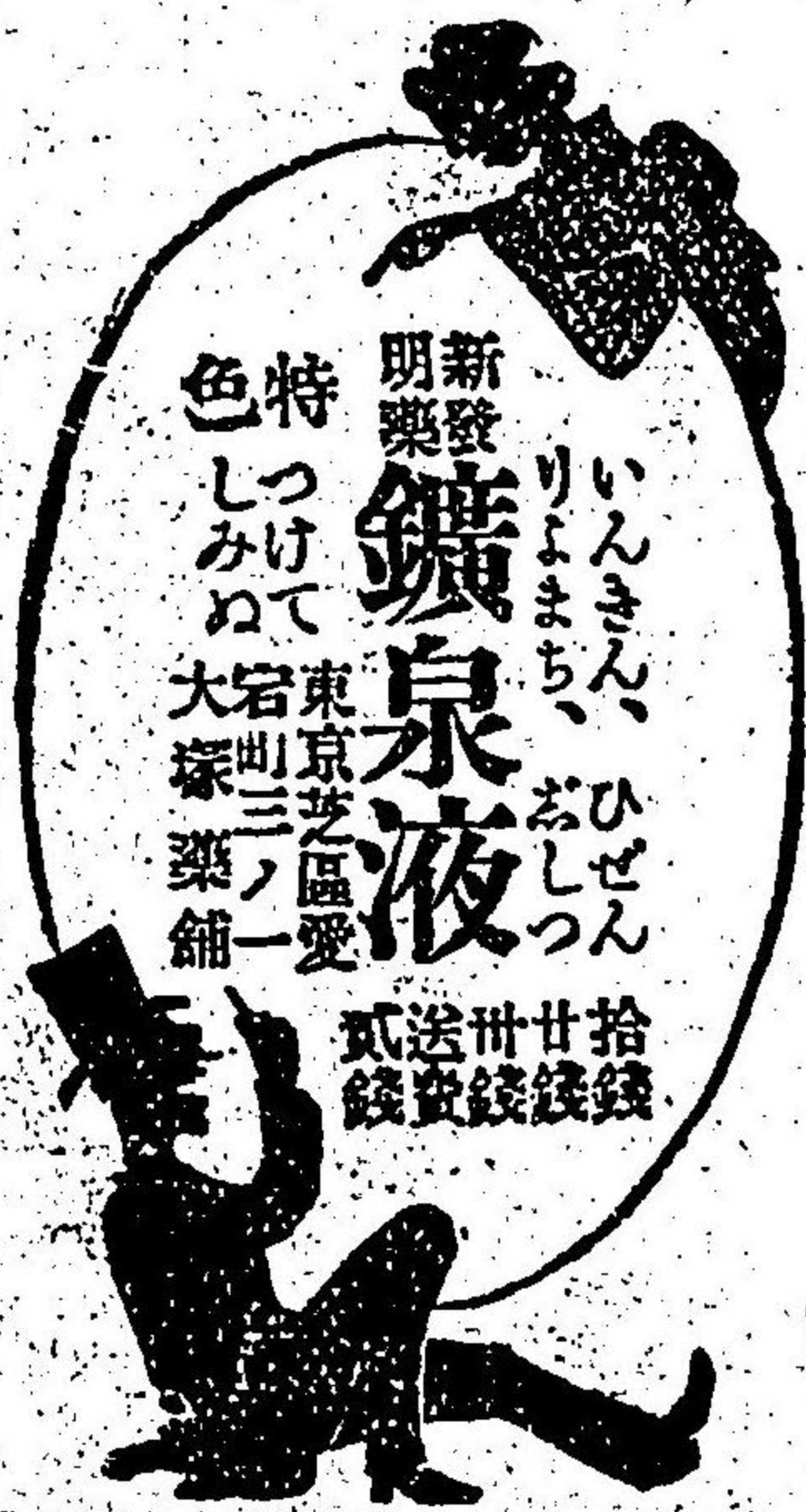
肖像画
東京神田區美土代町二の一神田橋通り
堀肖像畫館

小き寫眞を隨意の
大形に寫眞と少も
違はず復寫〇額面或
は掛軸に適す郵券
三錢價格表送る

商日本 愛讀の方にしてこの
券切板御注文の時は
特別割引券
御相談の値より特に三割引
堀肖像畫館主堀大次郎

東京市芝區愛宕下町四丁目一番地

金銀モール
製造販賣
岩井友士商店



新發 明藥 鑛泉液
いんきん、ひぜん
りよまち、おしつ
特つけ 東京芝區愛
しみて 大塚三ノ一
色 大塚藥舖

男奉公人周旋
Intelligence Office for Walo servants.
日本橋區堀船町一丁目三番地
出世屋 勅使河原鎌吉
電話浪花一七五七番

勸工場

東京市京橋區尾張町二丁目

京橋商品館
(電話新橋 二七七八八番)

内外美術工藝の精良品を
陳列し出品人一同大勉強
廉價の親玉、進歩の魁、
日本唯一の勸工場として
都下に鳴る又極々便利の
共通切手は本館の外にな

西洋小間物各種
洋服附屬品各種

今回種々新珍の舶來品着荷一
層の廉價を以て販賣仕べく御
來館御用仰られんを希ふ

(圖の館品商橋京)



商品館入口 市川出陳場

◎土地は芝浦新濱町にして冬は暖かく夏涼さを一眸に菟川灣の風光を庭園に控へ居候故終日御遊になるも決して眺め飽くことは無之候

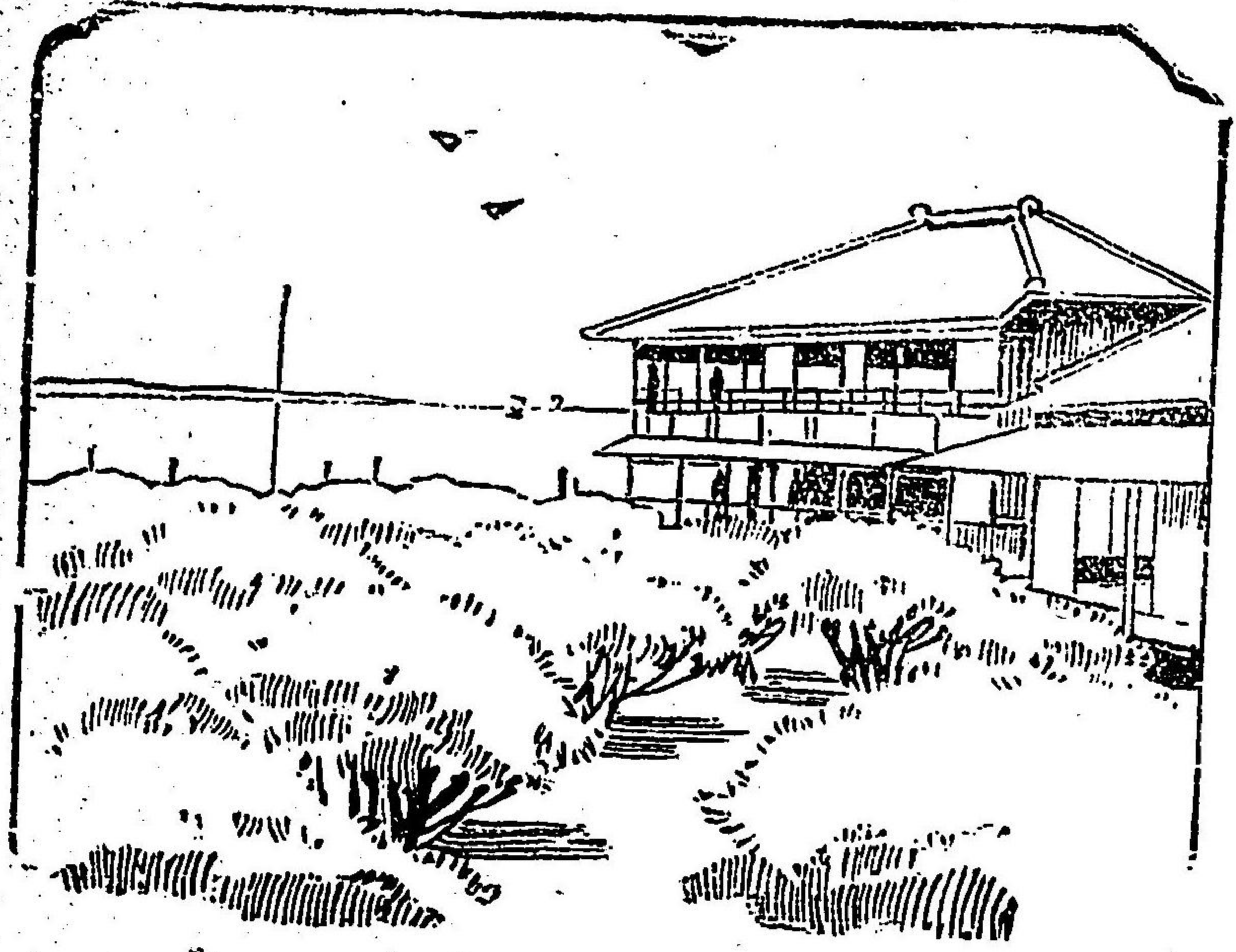
◎尙昨夏百疊の大廣間を新築し今夏更に浴場を改築いたし大廣間の敷も尙數多の附屬小座利も有之候故總て日便仕殊に御投宿御滞在の方へは十分の御便宜計り申候

御旅館
御料理

芝區芝浦濱町

芝浦海水浴

(電話新橋七四一番
三五七一番)



海陸物産委託賣買問屋

卸小賣

干ほし
鰯いか

御進物用として尤も好適美麗に調進仕候

日本橋四日市場十番地

大宮伊八商店

村井 弦齋 著 (家庭第一實用の書)

増補 食道樂 春の巻

第十四版

正價八拾錢 郵券代用一割増

送貨

▲市内五錢 ▲地方拾錢 ▲臺灣、朝鮮參拾錢 ▲米國開き封廿四錢

妻君「晩のおかずは何に致しませう」

主人「食道樂を讀んで經濟的の御馳走を拵へてお呉れ」

日に二度の食事をなす人は必ず一度此書を讀むべし

日本食品四百五十種の滋養分明細表あり

發行所

東京橋區二十間堅三丁目 電話新橋二千三十六番

報知社出版部

人物と事業

四六判全一冊
銅版木板
定價 二拾五錢
郵税 四錢

人物と事業は現代事業家の活寫真なり、學校長、商業家、工業家、銀行家、鐵道業者、航海業者、株屋、政商、高利貸、有志家、官吏、苟も現代有ゆる方面に活躍せる人物を捕へ明透の想犀利の筆を以て縱横に品隲し其の成効せる所以の失敗せる所を抓擷剔抉し毫も忌憚なく而も之れを現代に起れる事件に接觸せしめて評論したる所實に本書の創見にして一部の現代史を見るの感あり

目録

- ◎三大銀行の總裁(山本高橋添田) ◎井上角五郎 ◎兩宮敬次郎 ◎岩谷松平
- ◎村井吉兵衛 ◎故大橋佐平 ◎村山龍平 ◎住友家の新人材 ◎中上川氏 ◎其後任 ◎古川市兵衛 ◎田中正造 ◎三友論 ◎近藤、中橋、淺野 ◎取引所界の本
- ◎重太郎 ◎仙石實 ◎人物 ◎海運界の三人物 ◎馬越、島井、淺澤 ◎兩大學の總長
- ◎兩大關 ◎木内重四郎 ◎大貯蓄銀行の主宰者 ◎外山脩造 ◎池 謙 ◎兩大專
- ◎山川と木下 ◎二大貯蓄銀行の主宰者 ◎外山脩造 ◎池 謙 ◎兩大專
- ◎益田孝 ◎奈良原繁 ◎絹糸トランス社社長藤田四郎 ◎日本石油會社社長内藤
- ◎久寛 ◎櫻組の隊長西村勝三 ◎安田善次郎 ◎新舊法制局長官(奥田、一木)

發行所

東京市京橋區二十間堅三丁目一番地 (電話新橋三千六百十六番)

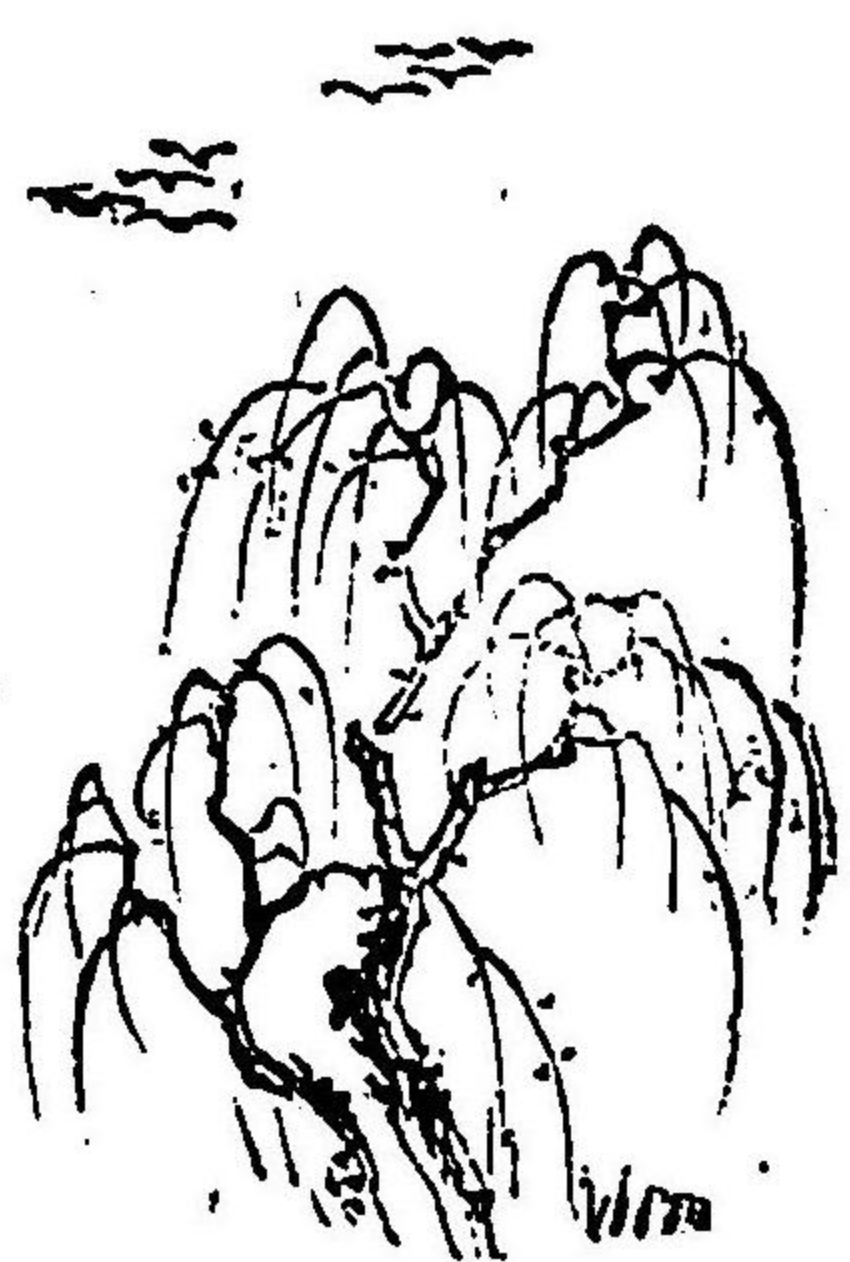
大日本實業學會

湖月樓

御料理

御宴會席

芝鳥森町 (電話新橋四九三番)



中島屋際物店營業廣告

- ▲五月幟
- ▲地口燈籠
- ▲坐敷掛物
- ▲提灯
- ▲凧
- ▲傘

弊店儀は十數年來右品目を製造し卸小賣罷在候處諸君の御引立を蒙り日増に繁盛仕難有茲に御禮申述候尙吹流し鯉の義は本尺並尺とも紙は本場物相用ひ場違ひ等の御掛念更に無之尤も入念ご彩色に注意し大々勉強を以て販賣仕候間續々御用仰付られ度謹で茲に奉願候也

東京日本橋區馬喰町四丁目十四番地

傘際物問屋

中島屋商店

- 芝區三田四國町一番地 郵便料理 第一 電話新橋三二〇四番
- 日本橋區通一丁丁十二番地 牛島料理 第二 電話本局一〇三七番
- 京橋區采女町一番地 牛島料理 第三 電話新橋九三一番
- 神田區連雀町十八番地 牛島料理 第六 電話本局一〇三八番
- 深川區東森下區四番地 牛島料理 第七 電話浪花四五七番
- 日本橋區吉川町一番地 牛島料理 第八 電話浪花四五八番
- 淺草區地方今戸町九十三番地 牛島料理 第九 電話浪花四九九番
- 淺草區東仲町一番地 牛島料理 第十 電話浪花四六〇番
- 本郷區本郷四丁目一番地 牛島料理 第十一 電話本局一〇三九番
- 麴町區隼町廿九番地 牛島料理 第十二 電話番町七六二番
- 麻布區六本木町一番地 牛島料理 第十六 電話新橋六七三番
- 赤坂青山南町一丁目六十三番地 牛島料理 第十七 電話新橋九九七番
- 牛込區通寺町一番地 牛島料理 第十八 電話番町一〇八番
- 芝區三田四國町一番地 牛島料理 第十九 電話新橋二一九三番
- 四ツ谷區傳馬町二丁目二番地 牛島料理 第二十 電話番町六五七番
- 本郷湯島天神町三丁目三番地 牛島料理 第二十一 電話本局二二二八番

法制局參事官法學士 柳田國男著 (新刊)

最新産業組合通解

全一冊

紙數三百五十頁 上製定價九十五錢 郵稅十錢 並製定價八十五錢 郵稅八錢

産業組合 即ち信用組合 販賣組合 購買組合 生産組合の目的は農 現世經濟界唯
 一の調和劑なり 本書は斯學專家にして法案制定の、是れ眞に 大著述にして經濟
 上及法律上の見地に立て餘蘊なく明瞭註釋せられたる者也夫れ行文の流暢平易なる 既明の周
 爲好個の師友たり 彼の地方の衰微と云ひ、人口の都會地集注と云ひ一として此 協力、貯蓄、融通の
 法を因せざるはなし而して之に對するの策は村落居住者の 組織を獎勵し全國
 の必要に應ぜんとするものなり 政府は銳意産業組合の組織を獎勵し全國
 各市町村に普及せんとす地方公共の志に當るもの今より之が準備を怠る可らず 本書又之に

社會問題之解決

發行所

東京市京橋區三十
間堀二丁目一番地

大日本實業學會

農科大學教授
農學博士 橫井時敬先生著

作物改良論

正價金五十五錢 郵税金六錢

農科大學教授理學博士石川千代松先生著
農學士 外山金太郎先生著

農用動物

正價金三十錢 郵税金四錢

農科大學教授農學博士橫井時敬先生
大日本農會幹事農學士石坂橋樹先生共著

農業要項

正價金五十錢 郵税金六錢

發行所

東京市京橋區卅間堀二丁目
電話新橋三六一六番

大日本實業學會

高等師範學校教授
農學士 佐々木祐太郎先生著

貿易作物論

正價金六錢 郵税金六錢

高等師範學校教授
農學士 佐々木祐太郎先生著

農業バクテリア論

(一名農業細菌學)

正價金五十錢 郵税金六錢

實業時論

一月一回

發行日

實業時論は我邦唯一の大農工商
並主義を以て材料は農商各方面の
新にして且饒多の論奇警て且精透なるを
而して毎號所掲の事を選んで每號其趣味を新にする其
要有益の如し
●社説 ●論說 ●資料 ●講演
●實業叢談 ●實驗 ●實業願
●實業傳記 ●月旦 ●風聞 ●錄
●問答 ●發明 ●通風 ●百話 ●錢
●東京市京橋區卅間堀二丁目
●大日本實業學會

著原ンデーマ
譯纂三敬村中

スセクサ
筆主誌雜
一タース
ツア、マ
ー、ヴオ

書叢功成

世は今や成効の時代なり百の空論も一の實行に如かず
有爲の青年が心を成功に潜むる素より怪むに足らず
蓋し實踐の方法如何を顧みればなり
本書は是れ彼の米國に於て著名なる雑誌サクセス主
筆オー、エス、マーデン氏の著述中何れも名聲中外に噴
々たるものにして成功の方法を示したるものなり其
著者の奇警にして嶄新なる素より言ふを俟たず
譯者は多年米國に留學して同國の事情に精通せるの
譯文の正格にして平易に流暢にして何人にも解し易く
世人の渴望を醫するに足るべきを信す。

(編一第)

品性の修養

初版即日
賣切
再版出來

定價(三冊) 前金五十四錢 郵税 一冊 四十二錢
六冊 前金一圓五錢 稅郵 六冊 廿四錢

(第二編) 處世と愛嬌 近刊目下印刷中
(第三編) 處世の良法 (第四編) 成功と機會
(第五編) 鐵心の鍛鍊 (第六編) 成功と經濟

會學業實本日大 地番一目丁二欄間十三區橋京市京東 所行發
(番六十百六千三橋新話電)

金製指環

●川端玉章先生考案並書



●加納夏雄先生考案並書

●一號ヨリ八號ニ至ル十八金目方三匁付片切彫刻價十
四ヨリ二十三圓迄同十八金目方三匁付平象嵌入價二
三ヨリ二十九圓迄同二十二金目方三匁五分付片切彫
刻價二十五圓ヨリ三十七圓迄同廿二金目方三匁五分付
平象嵌入價三十一圓ヨリ四十七圓迄(市外運送料金計別
市京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地
電話番號新橋三三三三(長距離加入)

時計寶玉類 金銀商 天賞堂
美術品及銃砲火藥

天賞堂出張所々在地
●東京市神田小川町 ●横濱市
●名古屋市 ●大坂市 ●廣島市
●熊本市 ●長崎市 ●小樽市

盃類圖案一斑

●玉章川端先生
(金、銀、白、白、安、安、母、母、尼、尼、孟、孟及木杯製作應用)



勢見州 岩ハノ 岩相ノ 以テ 以テ 以テ 以テ
スル 岩ト 岩ト 岩ト 岩ト
云フ 云フ 云フ 云フ
賀新 賀新 賀新 賀新

東京市京橋區尾張町二丁目十六十七十八十九番地
時計寶玉類貴金屬美 天賞堂
術品及各種銃砲火藥

天賞堂 出張所々在地
●東京市神田 ●横濱市 ●名古屋市 ●大坂市 ●廣島市 ●熊本市 ●長崎市 ●小樽市
贈呈 天賞堂營業一覽(送付)

製精行流新最



天狗煙草製造元 價廉三丁目 岩谷商會



十本入 金四錢

パイ

英國式口無卷煙草



特70

550

205158-000-5

特70-550

三十年後の東京

黙笑庵主人/著

M36

EDV-0172

